学園長だより 第31回

春の星

愛知淑徳学園理事長・学園長
小林素文

昨年は新型コロナウイルスによる緊急事態宣言によりやむなく中止となった大学の卒業式が、本年は学部ごとに星が丘キャンパス、長久手キャンパスで挙行されました。恒例のオーケストラや合唱団による送別演奏も来賓祝辞もなく、学長式辞はビデオ映像の簡潔な式でしたが、羽織袴やスーツで正装したマスク姿の学生たちが、キャンパスのあちらこちらで楽しげに語り合い写真をとりあったりして、キャンパスは久し振りに華やいでいました。

＊

昨年度はコロナ禍でオンライン授業が中心。海外留学予定者もオンライン留学とならざるをえませんでした。この経験から、今後は内外を問わず学外のオンライン授業を取り入れることで、より幅広いカリキュラム構成が可能となっていきましょう。

しかし「よき友、良き師、良き書に出会えれば大学生活は成功」といわれますが、それには昨年流行語大賞となった『3密』の2つ、密集（人が集ったり、少人数でも近い距離で集まる）、密接（互いに手が届く距離で会話や発声、運動をする）が不可欠です。

学生たちがキャンパスにあふれ、友と交わり、師と書をかこみ切磋琢磨している。そうした、いつもの大学風景に早く戻れることを祈っています。

＊

卒業生には次の歌を贈りたいと存じます。

真砂なす数なき星のその中に
吾にむかいて光る星あり

正岡子規がこの歌を作った年、親友の夏目漱石はイギリス留学、浅井忠（画家）はフランス留学に出発した一方、子規は脊椎カリエスで歩行もままなりませんでした。そんな境遇にありながら、夜空に無数に煌めく星たちを澄んだ感性で描写する子規の気高さを感じます。

オンライン授業だけでなく、昨年までの売り手市場が一転して就職氷河期といわれるような厳しい就職活動を強いられた今年の卒業生が、それでもなお、自分の内にある光を照らしてくれる星を求めて、気高く社会に旅立っていただきたいと心より願っています。

＊

今年は東日本大震災から10年。あの時ほど「いってらっしゃい。いってきます」と言葉を交わす当たり前の日常が大切に思われたことはありません。亡くなられた人の無念さ、ご遺族の喪失感を思うと心が痛みます。せめて、非業の死を遂げられた人たちが心安らかに天から見守り励ましておられると信じたいと存じます。

＊

三寒四温の冬が過ぎ木々の芽がふくらむ春。出会いと別れの季節になると、凍て空に煌めいていた星たちも柔らかく潤いをおびてきます。

生きている吾らに遠く春の星
（稲畑汀子）